

## 神様とのつながり

主任司祭 高木 健次

先日カトリック幼稚園の評価会という会合に、委員の一人として初めて参加しました。会合では、園長先生シスターや先生方が、カトリックの精神として、子供たち一人ひとりに、あなたは神様の子供として本当にかげがえのない存在なのだと伝えることを大切にしていると話されていました。そして実際の園の運営でもその精神を土台にして、色々な活動を工夫されているのだと拝見しました。席上、お一人の委員の方が、一つの質問をカトリック司祭である私に向けられました。一人ひとりが本当に大切な存在である、ということは公立学校でも度々強調される内容です。それをあえてカトリックの精神という時に、他の場で言われるそうした内容と違いがありますか、というご質問でした。皆様だったらどうお答えになりますか。

その場で私が申し上げたことは、カトリックに限らないことですが、やはり宗教は、人間の評価をこえた視点を前提にしている、この点が神様抜きに語られる言葉と違うのではないかという事です。神様抜きに語られる場合、「か

げがえのない存在」とはどうしても他の人、例えば両親、祖父母、先生がたの愛情に依存する面があります。もちろんこれはとても大切ですが、神様にとつてかけがえがないとはもつと絶対的な意味です。教皇ベネディクト16世は回勅「希望による救い」の中で次のようにおっしゃっています。「だれもわたしに耳を貸さないうきにも、神はわたしに耳を傾けてくださいます。だれと話すこともできず、だれに呼びかけることもできないときにも、わたしはいつも神に語りかけることができます。人間が希望できることを超えた必要や望みに関して、だれもわたしを助けてくれないときも、神はわたしを助けてくださいます。わたしが徹底的な孤独のうちに追いやられても、もし祈るならばわたしは完全に独りではありません」。この感覚が困難や失敗を過度に恐れることから、わたしたちを解放させるのではないのでしょうか。信仰をいただきたい私たち自身が神様をもつともつと近く感じることができませんように、そして他の人にも恐れることなく神様を伝えることができますように。